

第3章 偏西風にのって

戦闘機隊の出撃

空軍、海軍、陸軍のそれぞれが陸と海の分担をし、第1陣として17編隊計97機が出撃しています。墜落に陸での支障が少ない海側から、そして弱い光でも見やすい夜間作戦が決行されました。あのカワイイ見る影もなく恐ろしくとがったミツバチは、デビルビー(devil bee)と呼ばれました。先行隊の3機が誘導用のアルミニウム片を、高度2万メートルで撒くことから始めました。反射する光でデビルビーを呼び寄せる手段です。

「同期スピードには注意だな」

「相手はただのミツバチじゃないぞ」

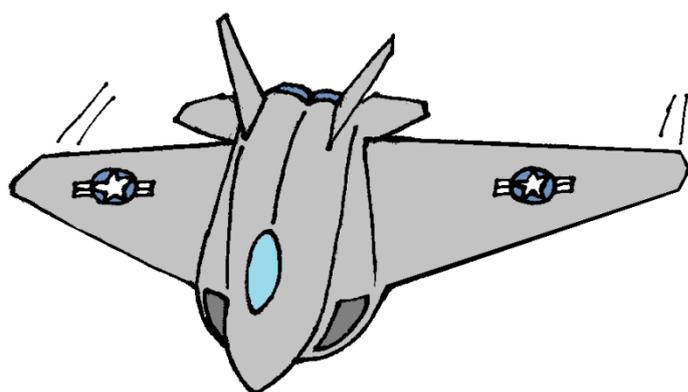
「マッハのデビルビーだ。悪魔だぜ」

「相手の同期スピードは時速1,500から1,800だ。我々3機で1点集中し、マッハ2で花粉を撒く。花粉の速度が1,800に落ちる1分後に、高度を上げ2万3千メートルまで緊急離脱する。この時の速度は時速800。3Gはくるぞ。失神するなよ」

3機のチームリーダーが無線で確認しています。花粉とは反スピリアンを搭載したミサイルのことです。

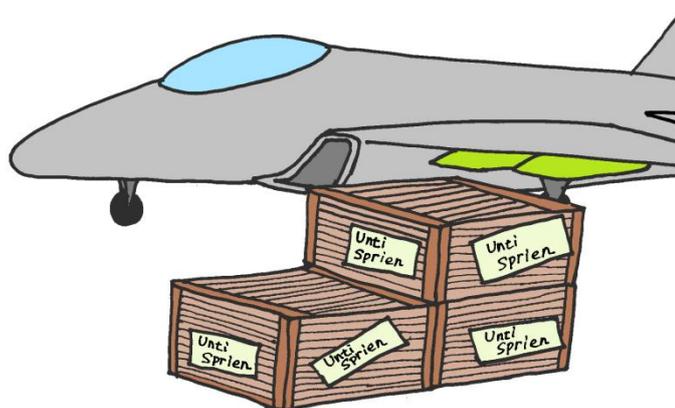
「たのむぞ、こころの木ちゃんよ」

戦闘機には、もう一つの改造個所がありました。それはコックピットの前方にこころの木が置かれていることでした。こころの木は離れていても、時空を通しスピリアンに反応します。3機でその方向が



分かれば、計算して反スピリアンを撒くことができるからです。反スピリアンをレッドフォード空軍基地で戦闘機の翼下に装着し、準備が進む中、先行部隊が作戦を遂行しました。

デビルビーの、集団の1つを見つけました。地上の大型レーダーが、デビルビーを探知したようです。さらにチームリーダーが、こころの木で位置を特定します。



「こちらはチームリーダー。たった今、地上から連絡が入った。フライングオブジェクトを見つけた。全機3時の方向へ向かう、速度をマッハ1.8まで上げるぞ。計算が正しいのをおなぐさみだ・・・」

3機の戦闘機は速度を上げ、チームリーダー機を前方に300メートル離れて2機が、左右に並走して後ろから追走します。マッハ1.8での300メートルはとてつもない危険な距離ですが、相手のデビルビーは長さが30メートルにも満たない集団です。このくらい近い距離で、ミサイルを発射しなければなりません。

「よし、25秒後にライティングオブジェクトに、コンタクトするぞ。計算ではオブジェクトの500メートル下を通過する」

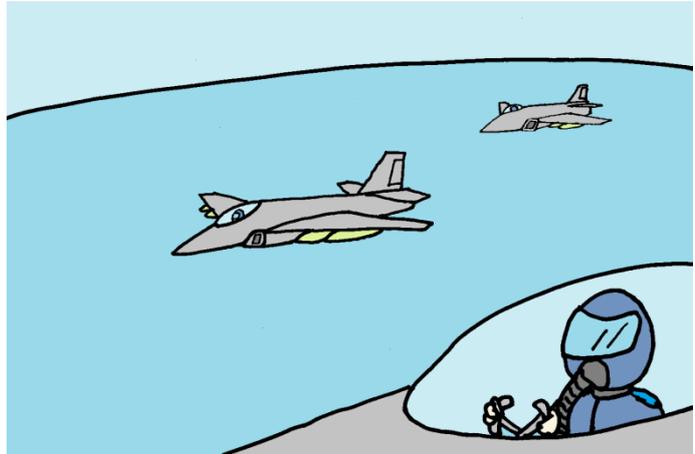
「後はオブジェクトがこれに、突っ込んでくれれば成功ですね」

「反スピリアン、発射用意。いいか3秒後に発射する。3、2、1、発射！」

リーダー機に続き友軍の3機も、反スピリアンミサイルを発射しました。

「全期、上昇離脱」

上昇のG（重力）が、操縦者に重くかかってくる中で、リーダーはミサイルの方向に目をやりました。ほどなく閃光を伴ってミサイルがさく裂しました。水平飛行に移り帰還のために旋回しながら、その光の具合をリーダーは見ていました。



「・・・うまくいってるといいが・・・全機、帰還する」

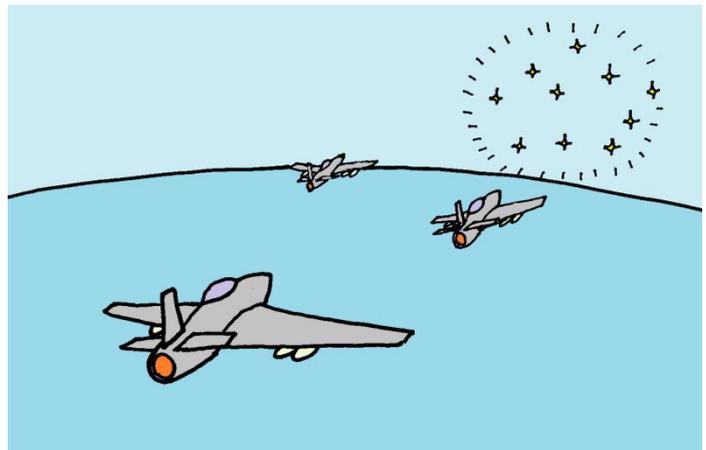
次々と任務終了の報告が入ってきています。

「第16飛行隊、任務完了」

「第3飛行隊、任務完了」

「第25飛行隊、任務完了」

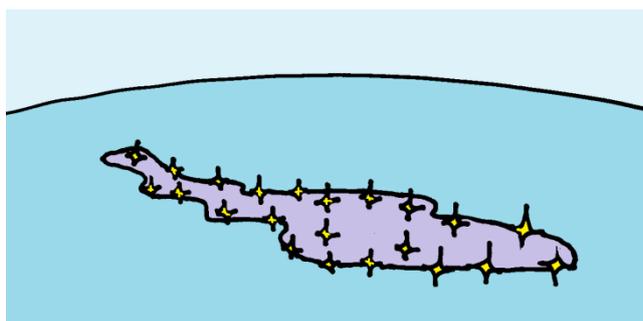
任務完了の報告が入ってくる中、機体がデビルビーに突っ込んでしまう戦闘機もありました。近距離のために、スピリアンの電磁波により操縦系統に異常をきたし、操作不能に陥る機も出始めました。



「メイデイ、メイデイ、第8飛行隊エリック・ジョンソンだ。わたしの機は墜落する。この後、高度1,000メートルでパラシュート離脱する。救援を頼む」

ジョンソン機はそのまま 80 メートルくらいはあろう長さの、スピリアンの大群に突っ込んでいきました。マッハ 1.8 で飛行しているので、相手との接触回避は人間の瞬発的な操作では不可能です。機はスピリアンの光に包まれて、キリモミをしながら海の方へまっすぐに落ちていきました。

民間飛行機は一切の、飛行禁止措置が取られています、さながら戦争のようです。そこへ飛行禁止措置を知らない単発レシプロ機が、2人で夜間飛行の途中のようです。その目の前を光の塊が海に向かって、斜めに一直線に落ちていきました。



「ほえ～～～、なんだ、あの光は？」

「昼間に流星か？それにしても明るいな？」

もう 1 人も光に包まれたデビルビーが、海に向かって落ちていくのを、目の当たりにしました。

「距離にして 4 キロか 5 キロってとこだな」

「飛行機の墜落かな？助けに行こう」

単発レシプロ機は、光る物が落ちている方向に向かって飛行しました。ほどなくその海面に到着して、上空 500 メートルくらいで旋回しています。

「海面が光っているな」

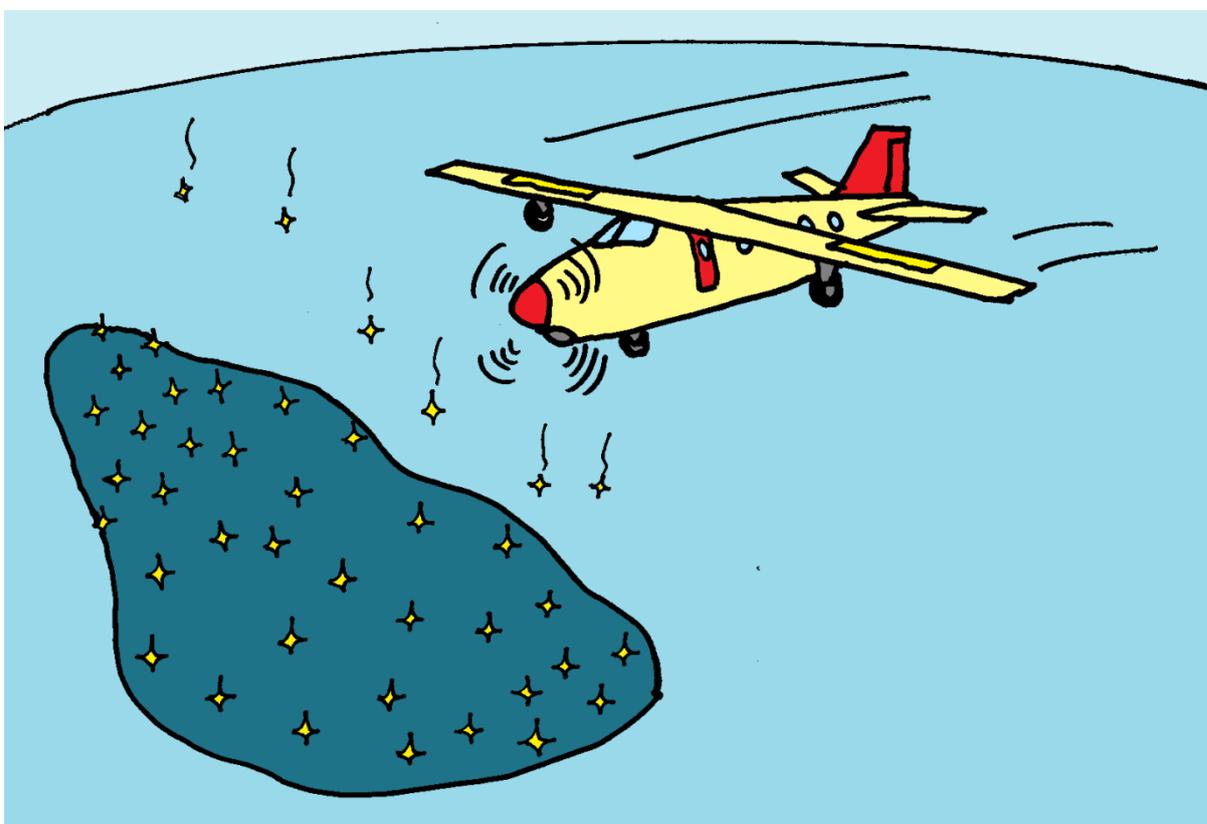
「なんだろう。航空局に連絡しよう」

海面におよそ 200 メートルほどの長さで、30 メートルくらいの幅の長い帯が赤色や黄色に光っています。すぐに航空局からは応答の通信が入りました。

「すぐそこを離脱せよ。危険な物体なので、決して近づくな」

「おい、とんでもないことだぞ。すぐに離脱しようぜ」

レシプロ機は急いでその場を去って行きました。

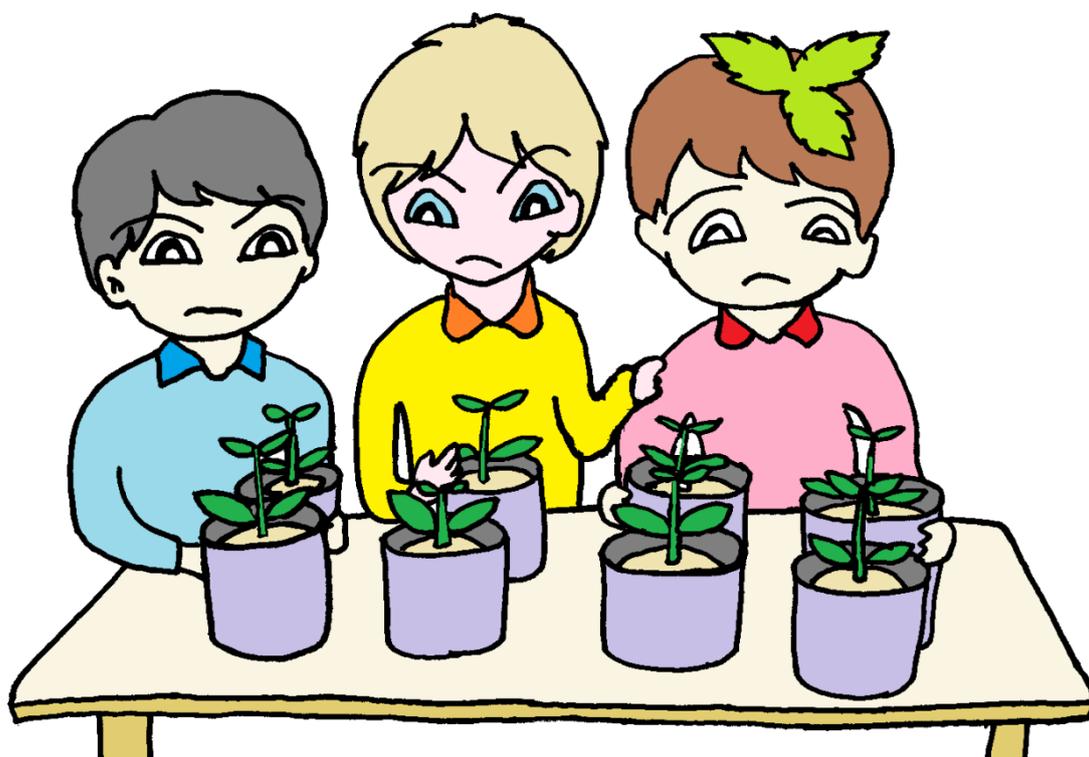


こころの木の特訓

一方、エイミー、バーバラ、トミーの子供3人と、トナ、デコのフレンズ2人が、首都のデザト・シティ国立病院にいます。葉が2、3枚ついた小さなこころの木を、各地から集められた子供たちに配っています。スピリアンの花粉アレルギーにより発症する病気は薬だ

けでは完治できません。こころの木でマインドウェーブを高め、自分を強くする訓練をしなければなりません。

国立病院のロビーでは、まだまだ運ばれてくる子供や、それに混ざって大人の患者であふれています。エイミーたちは、それぞれが別室に分かれて、20人くらいの子供や、比較的元気な大人の患者に、こころの木の話し方を教えます。



「こころの木を見つめて、鏡に映っているのはもう1人の自分よ」

エイミーはやさしくいいました。周りにはこころの木を両手に持った子供たちが円になって座っています。

「もう1人のボクなの？」

1人の男の子がいました。

「そうよ。もう1人のボクよ。そしてやさしく、こんにちはって
いてあげてね。そうするとところの木もこんにちはってしてくれ
るの。さあって。こんにちはって」

エイミーはそう子供たちにいいました。

「こんにちは」

「こんにちは」

「ちわっす。なんか恥ずかしいなあ」

周りでは子供たちが次々にお話を始めました。

「聞こえないくらいでもいいのよ。・・・こんにちは・・・って。
ほら聞こえないくらいだけど、わたしのところの木は、わたしに元
気かっていてくれたわ」

バーバラはスケッチブックを持ってきて、あの筆を練習してじょう
ずになった絵を使って説明しています。

「ところの木さんに、こうしていろんな絵を見せてあげるの。そう
するとところの木さんはわたしに、いろいろとお話してくれるの。
楽しいことも哀しいこと
も・・・」

バーバラは1枚の鳥の絵を、
ところの木に見せました。

【こわい・・・】

「・・・あっ、そうなんだ、
ところの木さんは、この鳥が
怖いんだって。仲間の木の実
を食べてしまうからって」



「そんな絵を見せたらかわいそうだよ」

一人の男の子がいました。

「でも、だいじょうぶだっていってるよ。鳥は実を食べるけどその種を運んでくれて、また違うところで芽を出すから・・・だいじょうぶだって、・・・」

「ボクもはやく話がしたいなあ・・・」

「すぐできるようになるわよ」

トミーはこころの木で失敗したことばかり話しています。



「おいら、このこころの木を持って走っていたら転んじやったんだ。そうしたら手をウシのうんちに、つつこんじやったんだ」

「あはははは」

「きたなあ～～～い」

「それからどうしたの？」

「そしたら、こころの木がおいらにいうんだ。近くの大きな葉っぱで拭けてさ。それで葉っぱをつまんで引っ張ったら、向こう側に大きな果物がなっていたんだ」

「食べたの？」



「おいらそれを食べて学校へ行って、テストを受けたら算数で100点を取っちゃったんだ」

「トミーさんはもともと、頭がいいんじゃないの？」

「おいらはアホだよ。算数なんていつも40点くらいなんだ。その時は頭がさえて授業のことを思い出してさ。初めての100点だったってわけさ」

実はこころの木とお話をするによって、忘れていたマインドウェーブが大きくなります。すると、元気だったころの楽しいことや、昔の懐かしい思い出がよみがえってきます。それは、もう一人の自分が心の中にいるかのようです。トミーはその時のことを思い出して、フレンズにもらった手帳に詩を書いていた。

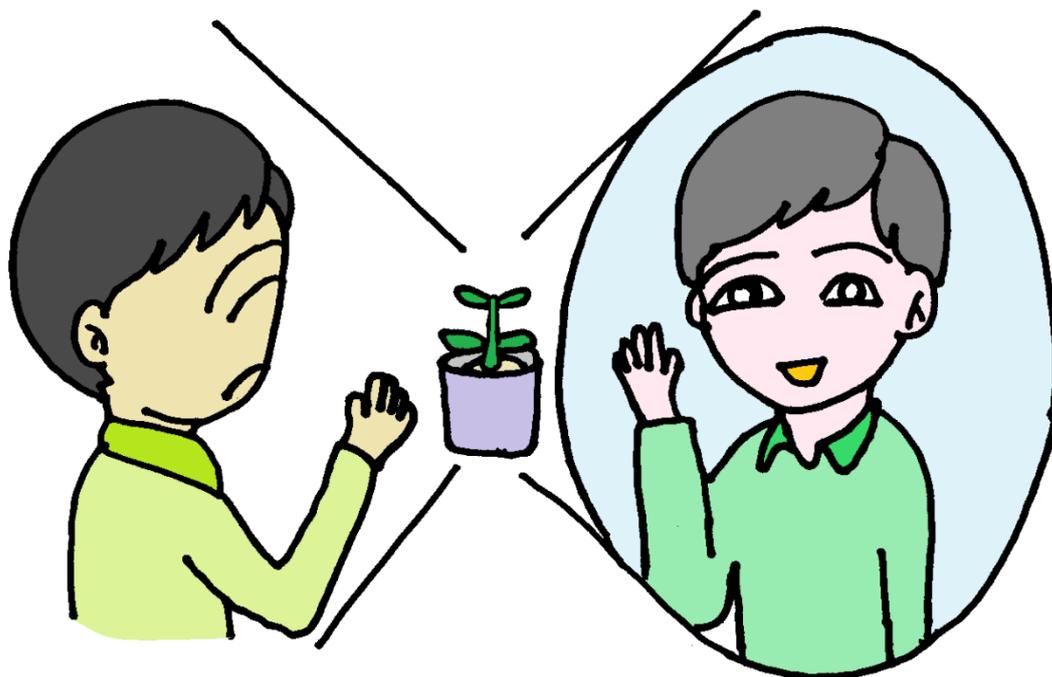
【もうひとりのボク】

朝起きたら ボクを鏡に映してみよう

そして おはようって ボクにあいさつしよう

こころの木が ほほえんで きっとボクを変えていくだろう

それでも最後は ボク自身の力で きっと自分を変えていくだろう



こころの木を増やせ

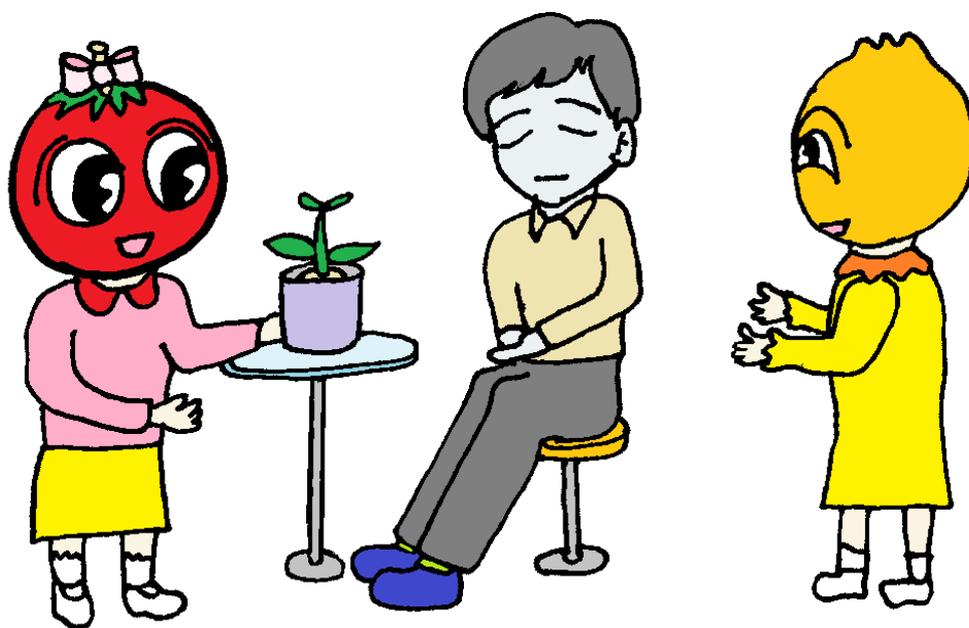
フレンズであるトナとデコは、もちろんこころの木とお話ができます。子供たちはエイミーたちに任せ大人を教えます。現場で医師は足りないのですが、各病院からは医師、看護師、心のケア一技師などのチームが編成され参加しています。大人たちは熱が出たり発疹が出たりするアレルギー反応の後の、精神的症状が特に深刻でした。

中には精神的に重篤な患者を、連れてきている病院チームもありました。

『みなさんにお見せできるよう、壇上に上がってきてくださいナ』

トナはある患者さんを壇上に呼びました。

『さあ、今自分で悩んでいることを話してくださいナ』



トナはその患者の前にこころの木を置いて、患者に悩みを打ち明けるようにとといいます。壇上には看護師も付き添い、一緒に隣の椅子に座りました。デコも横で心配そうに見ています。講堂には1チーム4、5人の病院グループが、そのようすを見守っています。患者さんはみんなの前で、こころの木とお話をするようになりました。

「・・・、わたしは・・・」

患者さんは話し始めました。会場が広いので、後ろの人は映し出される大型のプロジェクターをかたずをのんで見守っています。

「・・・わたしは、5年前に事業に失敗し・・・全てをなくし・・・今・・・住んでいる土地にやってきました。家族とも別れ子供とも会っていません」

なんとか話はしていますがしどろもどろです。

『今はどんな状態なのかって？こころの木さんは言っていますよ』

「仕事は何とか見つけて、ちょっとしたお手伝いをやっているのですが・・・。子供にも会えないと思うと・・・だんだん力が消えていくようで・・・。毎日が惰性で生きているかと思うと・・・本当に生きている価値があるのかどうか・・・。夢も希望も見つけれません」

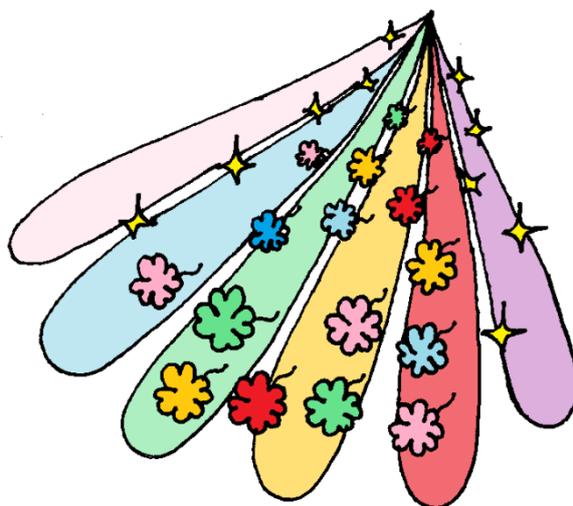
『こころの木をじっくりと見てくださいな。そして思っていることをもう一度、心から話してみてくださいな』

トナがこころの木を両手に持って、その患者さんの前に差し出しました。

「・・・こんなわたしにも、い、生きている価値はあるのでしょうか・・・」

患者さんは声を振り絞り、こころの木に話しかけました。そして多くの参加者の前にもかかわらず自分をさらけ出しました。

『みなさんも一緒にこころの木



に語りかけてくださいナ。みなさんのこの人に対する思いや、考えを心の中で語りかけてくださいナ』

するとどうでしょう。こころの木は少しポーっと光を放ちました。それは数回に渡り光ったり消えたりしました。

「オオ～～～ッ」

集まった人から感嘆の声が上がりました。しばらくそのこころの木を見ていた患者さんが口を開きました。

「今・・・こころの木が・・・わたしに語りかけてくれたのがわかります。わたしに自分をもっと大切にしろと・・・そして、きっと幸せが訪れる・・・と」

すると患者の顔は、あの壇上上がった時とは別人のように輝き、そしてはっきりといいました。

「みなさん、わたしは絶望のなかで今日、ここに来ました。何も期待することもなく、ここにやってきました。でも不思議です。これは本当です。急に元気になった気がします」

参加者は皆、患者に聞き聞いています。

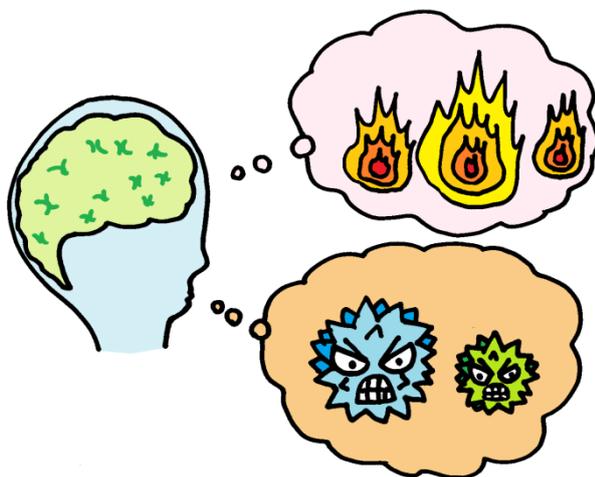
「これは手品でも仕組まれたことでもありません。それはわたしを連れてきたこの州立病院の皆さんが知っていることです」



連れ添ってきた看護師がいました。患者はそういって、壇上からそのメンバーに【ありがとう】と手を振って答えました。そのチームリーダーが壇上に上がってきました。

「みなさんこの方はもともと心が苦しく、さらに今回の花粉によりその病状が悪化しました。しかし今のこのほほ笑みは、見たことがありません。これは手品でもなんでもありません。なんらかの作用が働いているとしか考えられません。素晴らしいことです。これは本当のことなのでしょう」

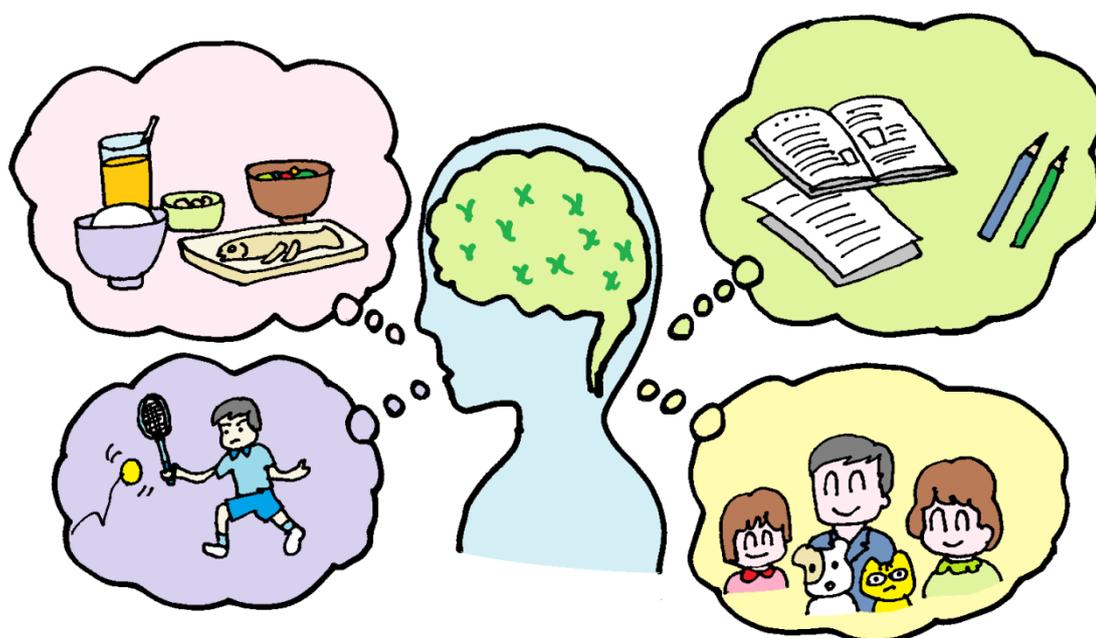
この国立病院で指導を受けた病院チームは、それぞれの病院へ戻り治療に専念します。1つの治療はスピリアンの心のアレルギー反応をおさえるために、反スピリアン拮抗薬を投与することです。レタたちはアイムシュタイン所長の研究所で栽培されたところの木の木を持ってきています。



それは広く他の病院にも運ばれ次々と栽培され、薬が培養されていきます。こうして出来た薬が患者に投与されていきました。だんだん発熱、発疹などのアレルギー症状は改善されていきました。

しかし後にヒューマニーワールドによって命名される物質「スピリアーゼ」は、前頭葉、脳下垂体に悪い副作用も与えます。これも後になって判明するのですが、偏食傾向にある子供や大人は、このスピリアン花粉に反応し、摂食障害を起こしたり、怒りの制御が不安定になりあばれたり、急に静かに沈んだようにおとなしく何もなくなりました。

子供には四六時中親が付き添い、大人の患者も監視状態におかれま
した。特に大きな大人が、暴れていては大変なので、しかたなく拘
束具を使う病院もあつたりしました。もうひとつはこのスピリアー
ゼの働きにより、前頭葉の制御が不安定になり、ありもしない現実
が現われる問題でした。この対処にこころの木が使われました。こ
ころの木の成分は森の青葉の成分のように、気持ちを落ち着かせま
す。それだけではなく、こころの木と話すことにより、心の中にあ
った悩みもひっぱりだします。マインドウェーブが増幅されたから
です。



失われていた記憶や希望に満ちた時が、鮮明に蘇ってきます。少し
ずつ患者が落ち着きを取り戻し前よりも増して元気になっているの
を目の当たりにし、医師たちは農家にもお願いしてさらに株を増や
していきました。

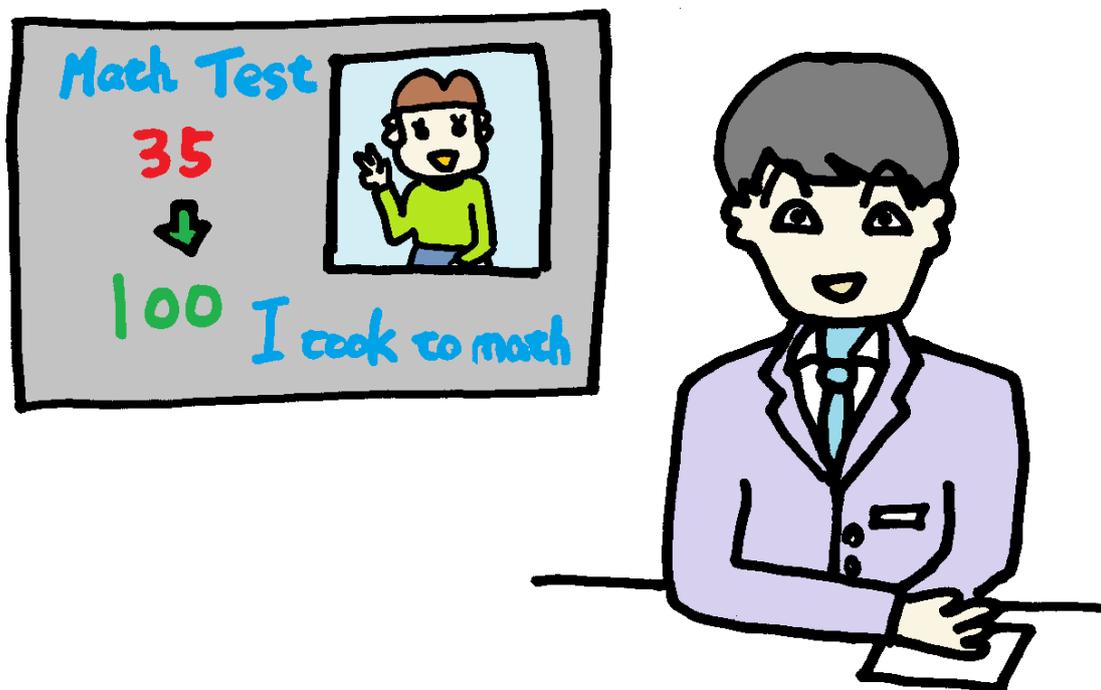
こうしてマロン村をはじめ最初に病気が広まった町や村から、患
者の病状は回復に向かって行きました。しかしこれを悪用する悪者
も現れてきました。人の心を操ることができれば軍需に利用できま

す。こうした連中がマロン村やアイムシュタイン研究所にもしばしばあらわれるようになりました。

軍需スパイの暗躍

そのころ戦闘機の作戦は極秘で行われたため、民間飛行禁止区域の公開以外の行動は一切公表されませんでした。報道機関はこぞって病気の対応やその後のようすを報道していました。

【突然、テストで100点を連発！】



【長年の難病が回復に向かい歩行可能に！】

【話すことさえ困難だった患者が社会復帰！】

報道機関は病院を駆け巡り、復帰した患者の社会生活をスクープしています。そして学校まで生徒を追っかけていました。今もテレビニュースで生放送が流れています。とある小学校での出来事です。

まだ授業中の教室にテレビカメラが入り、生徒と先生にインタビューしています。

「この生徒さんが算数 100 点を連発する生徒さんですか？」

インタビュアーがたずねました。

「そうです」

先生が横に立っている生徒とに手を向け答えました。

「どうして急に算数で 100 点を取ることができたのかな？」

インタビュアーが質問します。

「どうしてって・・・寝るときに算数でいい点が取れますようになって。こころの木にお祈りしたんだよ。そうしたら夢の中で算数の神様が出てきたんだよ。お前は算数が大好きだからもっと勉強するといいって言ってさ・・・」

「そうして勉強するようになったの？」

インタビュアーがいます。

「そうしたら算数ってとってもおもしろくてさ。別に 100 点なんて取ろうとも思ってもいなかったけどね・・・」

「先生！このほかにも才能を開花させた生徒が多いと聞きました
が・・・」

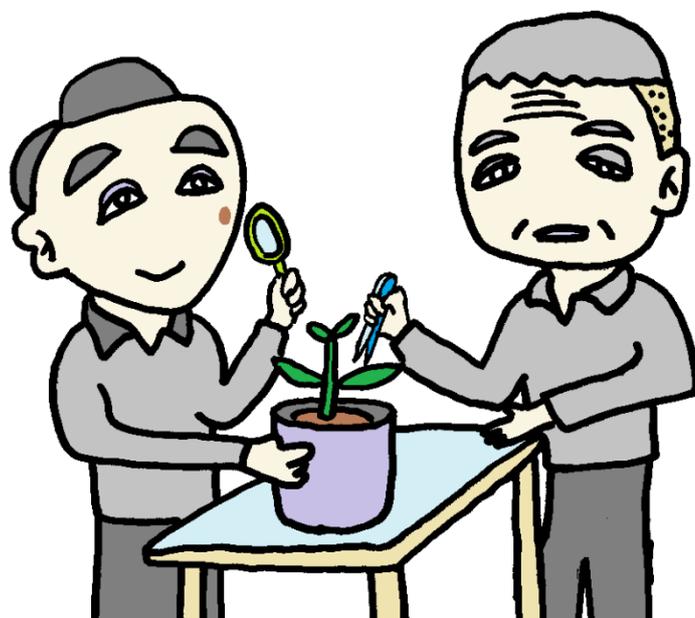
インタビュアーが質問を続けます。

「才能を開くというには大げさですが、みな興味のあるものに夢中になり、それなりに良い結果が出ています。本当に病気の前とは状況が違い、不思議なことで少し驚いていますけどね。わたしたちの教育は何だったんだろうかと」

このようなニュースや報道番組が次々と放送されています。マロン村の不思議な雑木林は連日、報道陣や見物人でごった返しています。しかし大統領命令により3重に柵が設けられ、軍の厳重な警戒の中で、入ることはできません。上空も飛行禁止措置が取られています。

しかしそんな中でも、こころの木を持って帰った軍需スパイがいました。さっそく研究所に持ち帰り、培養すると同時に成分を調べようとなりました。10センチメートルくらいに枝を斜めに切り、土に植えれば2、3日で根が生えてきます。とても簡単だということが分かっています。

直接成分を調べるには葉や茎をすりつぶす必要がありました。すり鉢に葉を2、3枚入れ、すり棒で葉をすろうと力を入れた時のことでした。その周りにいる人間はとてつもない頭痛と、頭に響くような嫌な音に襲われすりつぶすことができません。



「どうしたんだ。もう一度やってみろ」

「や、やってんだがな・・・」

もう一度すり鉢を抑えすりつぶそうと力を入れた時、また今度は体全体にしびれが来て、立ってられずころんでしまいました。

「どうしたんだ。俺にかしてみろ」

そういつて別のもう一人の人間が、同じことをしようとなりました。今度は全員が熱い熱のようなものを浴び、1メートルも2メートルも

飛ばされてしまいました。あたりを見回した軍需スパイは、こころの親木である大きな木に気がつきました。

「わかった、この大きな木が命令してるんだろ。これを別の部屋に移してやってみよう」

そういつてこころの木を別の部屋に移しました。そうしてもういちどすり鉢に手をかけた時のことでした。突然部屋が大きな音とともに、爆発し粉々になってしまいました。



「おい、相棒、お前の顔が真っ黒だぜ」

「そうか、そういうお前の服はボロボロだぜ」

「もうやめようぜ」

「もう一回だけやってみようぜ」

それでも悪徳研究者の心意気はあきらめませんでした。こころの木を外の離れたところにおき、もう一度すり鉢ですらうと手をかけました。

【ボワー】

すり鉢の中の葉っぱは1メートルくらいのすさまじい閃光を放ち、消えてしまいました。

「まっくらだ、どうしたんだ」

「おい、目が見えなくなったぜ」

軍需スパイは1ヶ月くらい目が見えなかったそうです。その後それでもあきらめきれないので、別の装置で分析することにしました。分光検査装置というレーザーで中身を分析する高価な装置があります。レーザーを当てた時のことでした。こころの木はすさまじい閃光を放ち、こころの木そのものも消失してしまいました。分光検査装置も部屋そのものも吹っ飛び、今度はたいそうなけがをして半年も入院してしまいました。

「あ、相棒、もうあの木はこりごりだぜ」

「そ、そうだな。治ったらきれいな花でも見に行こう」

大部屋のベッドの隣で、包帯に巻かれて2人は、静かにいました。

偏西風によって

「現在までの被害状況を報告せよ」

カナディ大統領は、いろいろと入ってくる情報を聞いていました。

「友軍戦闘機墜落17機、輸送機不時着1機、民間小型飛行機の不時着も数機ある模様です。民間機の原因は今回の影響かどうかは分かりません。」



「どうしたんだ、民間機は？」

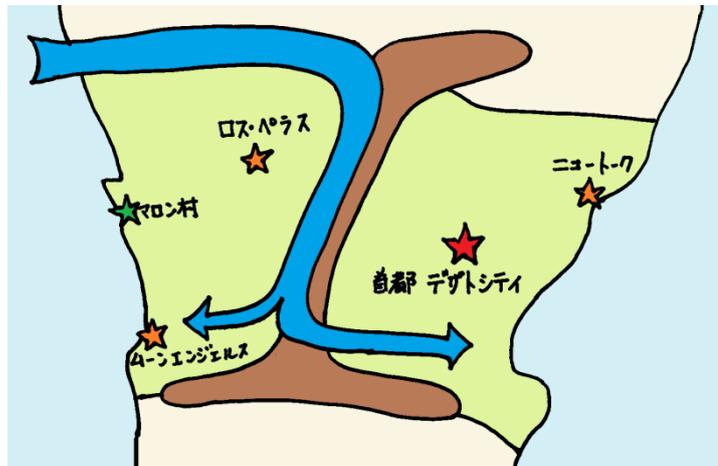
「いうことを聞かない報道関係者ですよ」

「人的被害は？」

「軍の関係者は今のところ死亡者はいません。みな脱出に成功しています」

「そうか！もう時間もない。偏西風が南下するこの1週間が山だな。ここで一気に片をつけないといけない。全軍に第2次トモダチ大作戦を命令する」

第2次トモダチ大作戦は大統領の最後の手段でした。ナメリア合衆国の中央より西寄りに南北に縦走する山脈があります。南の国境で山脈は東西に分かれています。この時期に南下するジェット気流の偏西風を利用して、これまでの海での作戦ではなく、一気に大陸全体に反スピリアンを拡散させようというものです。北からの偏西風は南に移動し、その南の国境で東西に分かれる山脈を利用して拡散させる計画です。



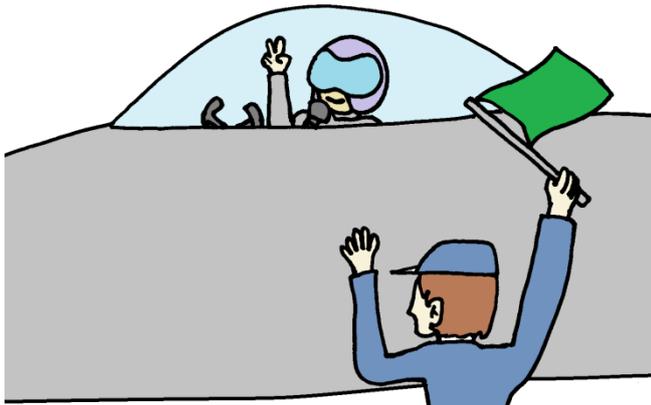
「難しいな。こんな嵐の中の出撃か？離陸でふっとんじゃいそうだ」

パイロットの1人がいいます。

「風が止んだ瞬間を見計らって離陸するしかないな。飛んでしまえばこっちのもんだ」

もう1人も、自分を勇気づけるように答えました。

「管制塔、タイミングを見計らって離陸許可を出してくれ。こっちはいつでもOKだ」



ほどなく管制官から離陸許可が下り、風が小さくなった時、第2次 Tomodachi 作戦の1号機が離陸しまし

た。こうして全軍のマッハ1.8がだせるジェット戦闘機117機が山脈の北方に集まり、南下する偏西風に沿って作戦を遂行しました。

ある飛行隊は高高度から急降下し、デビルビーを誘導し、側面から別の飛行隊が反スピリアンミサイルを発射します。高度1万5千メートルでの垂直と水平の戦闘機隊の交差です。危険と隣り合わせですが、プロのパイロットの意気は高く、偏西風の最南端より作戦が進められていきました。

デビルビーの位置と戦闘機の様子は最重要軍需拠点である、砂漠の地下の司令室に映し出されています。緊急回線を通じて大統領の執務室にも、ディスプレイされています。全軍のパイロットの交信も、すべてこの執務室で聴くことができます。

「第18飛行隊任務終了。緊急離脱する」

「第101飛行隊も任務終了だ。おいしいミルクが飲みたいぜ」

「ビールの間違いだろ」

少し浮かれている声に混じって、緊急報告もあります。

「第53飛行隊任務終了だ。だが友軍機は2機墜落、こちらも緊急離脱する」

「メイデイ、メイデイ、メイデイ！このやろう！バグ野郎に突っ込んじまったぜ・・・墜落する・・・」

戦闘機だけでなく、援護する輸送機や警戒機からも無線が入ってきます。

「速度は遅いがこちらのレーダーに、デビル野郎が反応したようだ。いくつかがまとわりついてレーダーは使えない。友軍機、どうだ？そっちから見えるか？」

「レーダーの周りに、街灯にまとわりつく虫のようだぜ。どうだ？操縦可能か？」

援護する戦闘機が輸送機の様子を連絡しました。

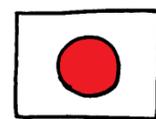
「操縦は可能だがだんだんいうことをきかなくなってきた。俺の上空でミサイルを爆発させるか？危険だがこっちは脱出装置がない。どうせ死ぬならやってみてくれ。バカなバグ野郎も道連れにしてやるさ」

「了解！だがミサイルはマッハ2以上。並走しても相対速度は時速1,200キロになるぞ。衝撃波で機体が損傷しないといいけどな」

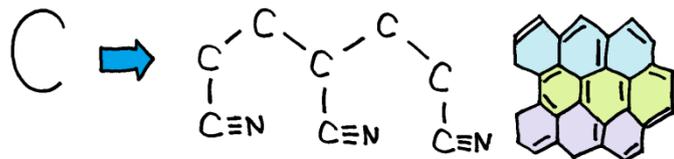
「ナメリアの純国産機だぞ。ボディはメイドインヤパンのカーボンだ。だいじょうぶだ。やってくれ」

大統領執務室のモニターを大統領、国防長官などが見守っています。

Made in Yapan



「大統領、少しお休みになられた方がよいのでは」



「馬鹿をいえ！こんな状

況で誰が寝られるもんか」

第2次 Tomodachi 作戦を遂行して、丸1日が経過していました。誰もこの部屋の人間は一睡もしていませんでした。

「偏西風がうまく南下し出しました」

気象担当者がいいました。偏西風は南北に縦走する山脈に沿って、半分ほどの位置まで下り東西に分かれます。一部は反転して再度北に向かっています。

「このタイミングだな」

大統領がつぶやきます。

「バグ野郎も本当にしつこいぜ」

国防長官もつい荒い口調でいってしまいました。モニターには気象衛星からのデビルビーの状況が青い点で表示されています。

「すみません。ついこんな口調で・・・」

「いいんだ、みな気持ちは同じさ」

あいかわらず飛行隊からの通信が多く入ってきます。

「第28飛行隊だ。なんとかやっつけたようだが・・・どうかね？」

「第98飛行隊任務終了。緊急離脱する」

「作戦機はこれで残りが4分の1程度になります。被害は・・・？」

参謀総長の口をふさぐように大統領はいいました。

「被害報告はもういい。あとはこの青い野郎が赤くなって消えていくだけだ」

「メイデイ・・・メイデイ・・・メイデイ・・・」

「第46飛行隊任務終了。離脱します」

とその時でした。

「山脈の北、東側のデビルビーの青い点が一つ赤くなりました。」

「オオーツ！」

1つの集団が消えたということです。一同はこぶしに力を入れ思わず叫びました。するとその南や山脈の反対側の青い点も、赤く変わり消えていきました。

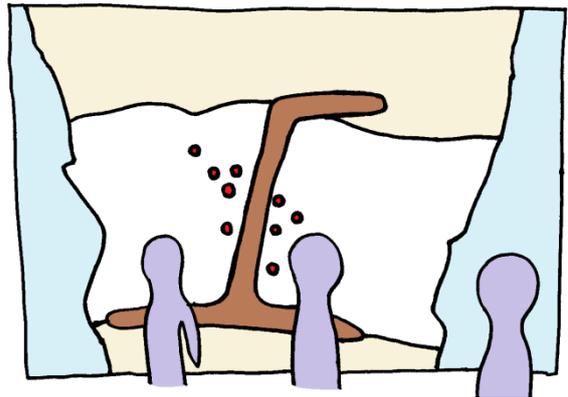
「やった！大統領、消えていきました」

報道官が小躍りして叫びました。

「うむ・・・そうだな」

大統領はこらえて冷静を保っているようです。

「また消えました。今度はずいぶん東の方ですね」



「第2次トモダチ大作戦の最後の仕上げだな。今のところ成功のようだ。偏西風の東西への移動にあわせ、最後の飛行隊を出撃させよ」

こうして作戦は3日3晩続けられました。大統領は部屋のモニターからデビルビーの青い陰影が、少なくなっているのを確認して、ようやく短い睡眠を取ることができるようです。